

ひかりのこ

12月園便り

聖ミエル幼稚園
2019年11月15日

月主題：喜ぶ

「人は人を許せるか」

11月13日に行われたカンガルーの会（聖書）には、下澤先生、園長を含め、8名の参加者がHIROBAに集いました。ゆったりとしたカフェのような居間で、お母様方からもたくさんの質問が出され、とても良い時間となりました。最後に下澤先生からキリスト教に関する本が数冊紹介されました。その中で、三浦綾子さんの本も紹介されました。

皆さんは、三浦綾子という小説家をご存じでしょうか。もう亡くなりましたが、旭川を拠点にしていたクリスチャンの小説家です。

私は高校時代に三浦綾子の『塩狩峠』に出会い、衝撃を受けました。塩狩峠で、ブレーキが利かず暴走を始めた列車に乗っていた若者が、身を挺して列車を止めた、という実話をもとにした小説です。毎日大して勉強もせず、大好きなテニスばかりして、自分の楽しみのためだけに生きていた私にとって、この生き方は本当に衝撃でした。他人のために、自分の命を捨てられるだろうか。どうしてこんなことができたのだろう。ずいぶん考えました。この若者も、クリスチャンでした。

大学を出て、中学校教員になって、結婚をして、子どもが生まれて、慌ただしく毎日を過ごしていました。育休中にまた、ふと三浦綾子が読みたくなって『氷点』を読みました。三浦綾子を世に出した作品です。これを読んでまた衝撃を受けました。これはフィクションですが、大変な内容でした。人間の「原罪」について描かれています。「人は人を許すことができるのか。」を問いただされているような内容でした。

最近、旭川の「三浦綾子記念館」に足を運び、4時間ほどゆっくり彼女について、展示を見ることができました。来館者はほんの一握りで、『氷点』の舞台となった見本林を窓から望みながらゆったりと彼女の作品を読むこともできました。久しぶりで、また三浦綾子の世界に浸りました。

人間は、良い部分もたくさんあるけれど、それよりも人を憎ん

だり、自分よがりになったり、人を許せなかったりする弱い存在です。神様は、そんな弱い人間にも「おいで」と両手を広げてくださいます。

年月を経てなぜか時々ふと会いにいきたくなる彼女の文章。自分の心が揺らぐときに、神様を感じるができるからなのでしょう。

園長 渡部 良子

キリスト教保育

「人生の四季」

13日、カンガルーの会で「人生の四季」というテーマで、ケーキとコーヒーをいただきながら、8名のお母様方と楽しい時間を過ごしました。みなさん、真剣にお話しを聞いて下さり、いろいろな質問をして下さって、私自身も勉強になりました。

ご質問の中に、キリスト教には生まれ変わりや、前世とか来世というものはあるのかという問いかけがありました。ごもっともだと思いました。人間の人生にも四季があって、命の誕生と青春の躍動の春と夏、病いの時期としての秋、心身の衰える時期として冬があり、やがて命の終わりがやってきます。しかし、再び春がきます。イエス様が復活されたように、私たちもまた、復活の新しい人生を歩みます。それは他のものに生き返るのではなく、あくまでも自分自身として生きるのです。

人生はただ一度きりです。だからこそ、自分の人生を愛する人々と共に、楽しく有意義に、悔いのないように生きようと、私たちは願います。イエス様は「明日のことを思い煩うな」と言われました。これが、ただ一度の人生を楽しむ秘訣です。今日は今日で終わり。一日ごとに自分をリセットし、前の日を引きずらないこと。そして明日、人生に一回しかない、与えられた一日を大切に過ごせばいいのです。できれば、ひとことの感謝のお祈りとともに、です。

チャプレン 司祭 下澤 昌